

## 災害対応の今昔

四国の災害記録を見ると、こんにちほど行政の制度や対策が整っていない時には、災害前から被災後の各段階で個人や地域がそれぞれ主体的に対応していたことが分かります。

### ■災害前の準備と災害時の様子

明治19年(1886)9月、高知県中村町(現四万十市)では6日午後から降雨が始まり、10日午前には風雨が猛烈になりました。「中村町風水害史」(1938年)には、水害に備えて住民が家財を高所に移動させるなど各戸の判断で準備する様子や、災害時に地域の人々が助け合って高齢者や病人を避難させる様子が描かれています。「各戸家財諸道具を高さ処に移し、水揚りの用意に忙殺せられしが夜に入り雨勢風力共に愈々猛烈を加へ瓦を飛ばし、壁を破り、樹木を抜き其の勢の強烈なるに驚き、壮者は老人を背負ひ安全の地を求め遁るゝあり、或は病者を保護して山に登るもあり。」

### ■水防活動

大正元年(1912)9月23日、香川県土器村(現丸亀市)で土器川の堤防が決壊し、全村の8、9割まで浸水しました。水深は平均7尺に達し、被害は家屋の浸水360戸、流失15戸、浸水反別158町歩等に及び、収穫は皆無となりました。「土器村史」(1954年)には、「二十二日は徹宵水防に努め、二十三日には歩兵第十二連隊兵士、丸亀市青年団応援出動して水防に尽力せられた。」と記され、堤防を守るために、まずは地元の人々が夜を徹して水防活動を行い、翌日兵士や丸亀市青年団が応援していたことが分かります。

### ■被災者支援

昭和9年(1934)9月21日の室戸台風により、愛媛県新立村(現四国中央市)では死者2人、住宅の全壊7戸、床上浸水20戸、農地流失17ha、山崩れ18箇所等の甚大な被害が出ました。「新宮村誌 歴史行政編」(1998年)には、「郵便局職員、役場職員、学校職員、駄場同業組合員等からの義捐金や新立、上山両村からの支出、被災軽少の村民からの拠出金あり、被災者を救援。」と記され、義捐金や村のお金に、被害が少なかった村民からの寄付金も加えて、みんなで被災者を救援した様子が示されています。

### ■復旧活動

昭和13年(1938)9月5日の洪水により、徳島県下分上山村(現神山村)では家が崩れ、県道、町村道及び橋梁が流失し、交通・通信が途絶しました。「下分上山村誌」(1961年)には、この時、村民や行政だけでなく、近隣の村の人々も労力奉仕を行って県道の復旧に力を尽くしたことが記されています。「学校職員・児童は勤労奉仕団を組織して、県道仮道作業を行って交通を計り、川島土木出張所の全員が出動して復旧につとめ、隣村の応援と郡農会・鬼籠野村から白米・金品の義捐、県立農業学校・浦庄村青年学校生徒・藍畑青年団員の来援があり、何れも食糧携帯で小学校に宿泊して、尊い労力奉仕を行い、緊急を要する県道の修理を成就することができた。」

近年は災害対応を行政に依存する傾向が強まり、避難勧告が遅すぎた、支援が足りない、復旧が遅いなどと、災害後に行政が批判の矢面に立つこともありますが、災害への対応は行政だけでできるものではありません。災害への対応は行政だけでなく、個人、地域もそれぞれの役割を果たすことが大事だということを、過去の災害記録は教えてくれます。